

フィールドは、実践テーマの宝庫だ。

ソフトウェア情報学部／教授 阿部 昭博



あべ あきひろ

筑波大学大学院経営・政策科学研究科(修士)経営システム科学専攻を修了、博士(学術、東京大学)。大手メーカー系IT企業の研究開発職などを経て1998年、本学へ。主な研究テーマは情報システムの分析・設計法、地域コミュニティの情報化。岩手県内の企業・行政・NPOと連携、社会ニーズを反映する教育・研究を一貫して進める。情報処理学会、日本社会情報学会に所属。また岩手ネットワークシステム「地域と情報システム研究会」代表幹事を務める。

机上を離れて社会の中へ飛び出すと、たしかに捉えられるテーマがあります。教育・研究の対象として阿部先生が取り組む《社会情報システム》は地域社会や、そこに暮らす人たちの諸課題と不可分の関係です。フィールド(現場)を知り、テーマを探り、問題解決型のプロセスを通して技術的な対応方法を導き出す。こうした流れの中で「きっかけ」を得て、指導を受ける学生は主体的な学びのスタイルを身につけます。ソリユーションをめざしてソフトウェアの応用を図り、システムの構築から運用、そして検証までをも視野に収める方法論。その素地は、民間企業でSEや研究開発職に就いた頃に培われました。「つかえるシステム、役立つシステム」という形でITのメリットを地域社会に示せることが、この領域の存在価値です。また人文科学・社会科学のジャンルと関連する要素が強く、学際的な色が濃いのも特徴ですね。看護・社会福祉・総合政策といった、他学部の専門家とのコラボレーションにも取り組んでいます。RFIDと呼ばれる無線ICチップと携帯電話を活用し、観光情報を送信する地理情報システムの実証試験が平泉町で進行中です。ユニバーサルデザインに対応する先駆的なプロジェクトの頭脳、阿部先生の多忙は続きます。

強いのは、迷いや悩みに克ったから。



医療法人 楽山会 せいいてつ記念病院／看護部

麓 智奈美さん…左
菊池 理恵さん…右

[いずれも看護学部・平成17年3月卒]

高校から大学を通してクラスメートで、仲良しだった二人が地元に戻り、おなじ病院に勤めています。釜石市出身の麓さんは新人時代から引き続き、内科病棟で2年目を過ごしています。消化器や循環器を患った入院患者へのケアなどで忙しい毎日です。「すこしずつ、自信のようなものが湧いてきましたね。仕事柄、高齢者をお世話する場面が多いです。これからは地域社会を巡回する訪問看護など、福祉の分野との接点も深めながら仕事の幅を広げようと思います」。そして、隣町の大槌町に実家がある菊池さん。整形外科病棟、外科系の混合病棟を経て、この夏から透析室に勤務するようになりました。透析認定看護師の資格を取ることが、在学中から

の目標です。近未来の目標に手を伸ばし、さらなる成長の時を迎えています。「4年次の看護総合実習で人工透析の患者さんを受け持ったのが事実上の原点です。思うようなケアができなくて悩んだり落ち込んだりしましたが『あなたは、この点が良いから大丈夫』と指導スタッフからプラス評価をいただき、看護職に就く決意が固まったことを覚えています」

菊池さんの言葉を受け、麓さんは「臨床実習を経て、それぞれ自分の適性を見定める、あるいは看護職への気持ちを決める。在学中は、そういう時期も欠かせないと思います。迷いも悩みも喜びも、みんなで共有して励まし合って一緒に進んでいけるのが看護学部の美風だった、と胸の奥で感じています」

ようこそ、自由なる学問の場へ。

共通教育センター／助教授 三宅 禎子



みやけ よしこ

筑波大学第三学群社会学類を卒業。プエルトリコ大学社会学部を経て、京都外国語大学大学院・外国語研究科を修了。外国語教授法の一環として、学生参加型の授業をオリジナルで創る。またラテンアメリカ・カリブ地域研究、女性学が専門分野である。アメリカで4千万人にも達するヒスパニック、特に女性を巡る社会的・政治的・文化的な状況を注視しており、こうした分野の論文・著作の執筆にも意欲を燃やす。日本ラテンアメリカ学会会員。

「オーラ! (こんにちは)」と呼ばば「オーラ」と応える。シンブルな言葉のやり取りでスペイン語に親しめば親しむほど、コミュニケーションのスキルはアップします。また語学レッスンは、異文化理解へのトビラを開ける第一歩でもあります。「文法とか語順とか細かい点は、あまり気にしないほうが良いのかも。まず話すことから始め、スペイン語という世界的な言語の面白さに目覚めてほしいと思います。またカリブ海や中南米などには、スペイン語を母語とする国が見られます。そのような文化圏を知る手がかりも、私の授業を通して得られるはずですよ」。開学の頃からスペイン語を担当してきた三宅先生は、その博識ぶりを活かして全学共通科目「スペイン・中南米事情」も講じています。ラテン系の音楽に映画、サブカルチャー、そして料理づくり…。入門編だからこそ難しい内容は避け、タイムリーで身近な素材を示しながら知ることを喜びをアシストします。また海外の話題に触発された学生に、ご自身のホームページへアクセスしたり、海外体験者の輪に加わったりするよう勧めています。地球のあちこちで起きていること、社会の様子。さらに、留学や旅に関するリアルな情報。これらを介する人と人との結びつきは、国境も民族も言語も超えて広がっていくのです。

支え、励ます仕事で私は生きている。



財団法人 みちのく愛隣協会 東八幡平病院

菊池 水恵さん

[社会福祉学部福祉臨床学科・平成17年3月卒]

医療ソーシャルワーカー(MSW)として働く菊池さんは、大学で心理学を専攻しました。卒業研究のテーマは「児童を虐待する側の心理」。混乱する社会や子どもの置かれている状況を、ストリートに映し出す内容でした。「社会保障論」「障害者福祉論」「カウんセリング」といった科目を通して社会福祉の存立基盤を理解した成果が、対人サービスの現場で活かされています。職場は、岩手山と八幡平の間に広がる松尾村村台に。とても山が近く、空気が澄んで静かな佇まいの中に、リハビリ施設を併設した病院が建っています。四季が鮮やかで、温泉もスキー場も産直施設も至近距離に位置する当地に、菊池さんは部屋を借りました。受け持ちの仕事は相談業務。医療費

に関するアドバイスでは、公的な給付制度を活用できるようメリットや申請方法を説明します。独り暮らし、病弱な方への退院支援では、ふだんの生活に役立つ制度を紹介。少しでも手助けを、と努力を惜しみません。「人との信頼関係を築くのは、つくづく難しいと痛感しています。でも、さまざまな不安や悩みを抱えていた方から『いろいろ教えてもらって助かりました』と、涙ぐんで感謝されることも。それまでの苦労が報われる思いです」。プライバシー情報を扱うので、否応なしに緊張感を強いられます。医療法、障害者自立支援法、そして介護保険制度など法制の見直し・改正が行われるたび、内容を把握して対応を図るのもMSWの務めです。